

## 膝前十字靭帯再建術後のスポーツ復帰に影響を与える因子の検討

○北口 拓也 (きたぐち たくや)(PT)<sup>1)</sup>, 田中 美成 (MD)<sup>2)</sup>, 辻本 のぞみ (PT)<sup>1)</sup>,  
竹下 真弥 (PT)<sup>1)</sup>, 明崎 幸仁 (PT)<sup>1)</sup>, 天野 大 (MD)<sup>2)</sup>, 衣笠 和孝 (MD)<sup>2)</sup>,  
堀部 秀二 (MD)<sup>3)</sup>

<sup>1)</sup> 大阪労災病院 中央リハビリテーション部

<sup>2)</sup> 大阪労災病院 スポーツ整形外科

<sup>3)</sup> 大阪府立大学 総合リハビリテーション学研究科

### 【目的】

ACL 再建術後のスポーツ復帰 (Return to sport; RTS) に関連する因子についての報告は散見されるが, その影響及び復帰を予測するカットオフ値について報告したものは少ない. 今回我々は ACL 再建術後の RTS 関連因子を検討するとともに, そのカットオフ値を得る事を目的とした.

### 【方法】

当院にて競技レベルへの RTS を目的に ACL 再建術を施行した 124 名 (平均年齢 17.0±2.7 歳, 男性 50 名, 女性 74 名) を対象とし, 術後 1 年時の RTS 状況により復帰群, 非復帰群に分類した. 評価項目は術後 6 ヶ月時の等速性膝伸展筋力患健比 (QI), Single Leg Hop 患健比 (SLH), IKDC subjective score (IKDC), Anterior Cruciate Ligament-Return to Sport after Injury scale (ACL-RSI) とした. 統計処理は RTS 関連因子の特定に多重ロジスティック回帰分析を行い, ROC 曲線にてカットオフ値を算出した.

### 【結果】

多重ロジスティック回帰分析の結果, SLH (オッズ比 2.9 per 10 units; P<0.01), ACL-RSI (オッズ比 1.8 per 10 units; P<0.01) が RTS の予測因子として特定された. RTS 可否のカットオフ値は SLH 81% (感度 89%, 特異度 61%), ACL-RSI 55 点 (感度 69%, 特異度 83%) であった.

### 【考察】

今回 SLH, ACL-RSI が RTS 可否を判断する上で有用である事が示唆された. 今後術後 6 ヶ月時点で SLH 80%, ACL-RSI 55 点以下の症例には, 特に介入に注意を要すると考えられた.